

CAP おかやま / CAPP0(子どもへの暴力防止プロジェクトおかやま)

「倉敷市菟小学校の避難所における性被害の予防事業」

実施した事業の内容・成果

《実施した内容》

- ① 7/28.29.8/5 (各日、同内容) 支援とは、性暴力とは、聴く練習、性暴力に遭った人の話の聴き方等の研修を実施。
- ② 7/28～8/31 性暴力予防のために避難所での見回りと傾聴支援 (13～18時, 18～24時×35日・のべ129人)
- ③ 9/1～29 全ての子どもへの退出後も引き続き避難所で傾聴支援 (16時～22時×23日・のべ47人)

《成果》

- ① 避難所での性被害の報告はなかった。夏休み最終日近くで子どもの会話から、家庭等で性の情報が不適切に伝えられていることが判明。該当学校へ繋ぐことで、その子の支援にあたってもらうこととなった。
- ② 保健師・看護師・DWAT等の専門職不在時間帯の避難所での傾聴活動は、日中避難所にいない人の話を聴き、必要なことを繋ぐ支援の隙間を埋めることとなった。DWAT等との引き継ぎでの情報共有により、きめ細かい支援に繋がった。

- ③ 普段着で支援に入ったため、世間話もできる横のつながりを作ることとなった。ピブス等を着用した避難所を管理している方には話せない不満や不安を語られ、CAPP0がクッションの役目を果たすように、問い合わせを含め、繋ぎ、調整することで、被災された方が安心感を取り戻すこととなった。
- ④ 毎日、同じ名札を付けたメンバーが入ること、核になるメンバーが毎日、あるいは2.3日に1度は入ることで信頼と安心感を生むことができた。
- ⑤ 避難されている方々を繋ぎ、退所後のつながりを作ることで、退所後の居場所づくりにも繋がっていく支援をすることができた。
- ⑥ 事前研修により、CAPP0メンバーが共通理解し、練習して現場に入ることができたので、メンバー同士も安心感を持って対応できた。また、研修参加後も、聴くことが難しい方は、自身で見極めをして参加しないことを選べたことも2次被害を防ぐために良かった。



研修風景



子どもたちが自主的に書いた「集いの場」へのお誘いアート



DWATさんとの引き継ぎ



避難所での傾聴支援

課題

・性暴力被害に対する支援の認知度を上げる必要性

阪神淡路・東日本・熊本等での被災地での性的被害が報告されているが、その予防のためのシステムが構築されていない現状がある。菫小学校では、他県の支援チームがそのことを指摘し、見回りを開始していたが、実際に該当者が出て来た時にどう支援するか知識やスキルは持っていなかった。まずは、支援の側が意識しておくこと、そして、その聴き取り等に関する学びも必要だ。通常でも声を上げにくい被害だからこそ、気づく視点の重要性や暴力は許さないという姿勢が抑止力になることも共通理解としておきたい。

・学校という場を避難所にするということの課題

避難が長引けば長引くほど、いら立ちや不安は募っていく。それは、おとなも子どもも同じだが、声を上げやすいおとなと異なり、おとなの不安な様子を見聞きした子どもたちは遠慮しながら生活している。それは、避難している子どもだけでなく、避難所となった地域の子どもたちにも影響していることを彼らの口から聴くことができた。子どもを心の中を話せる場が必要である

学校が避難所となることで、「学びの場」を構築し、提供することができても、子ども本来の姿でのびのびと過ごす場の設置は難しかった。おとなもしんどい思いをしているが、子どもも同じようにしんどい思いをしていることを考えると、子どもの遊びの場を保証する避難所づくりも今後の課題となる。

・運営・連携の在り方

7/28 初めて避難所に入った夜、年配の方が話された「一番、しんどかったのはここに来た初めの1週間。あれこれと指示され、お世話され、本当に情けなかった。」という支援の在り方を問う言葉が、私たちの活動を貫く姿勢となった。避難所立ち上げ時にも伴走型支援という視点の必要性を感じる。また、運営している側が物資等を配布し渡す側、避難している側が与えられる側という力の不均衡が、避難している人の心に打撃を与えることへの配慮も必要だろう。個別にニーズは異なるので、細やかな対応は本当に大変で、力量が試されることだろうが、当事者の声に耳を傾け、受け取り、丁寧に対応することが、避難所運営の円滑さにつながるのではないかと感じる。

過去の避難所運営の中でも、性暴力を生まない配置やトイレ等の設置数を配慮しているものも既にある。全ての避難所で、スタンダードとなる形の学びも必要だろう。さらに、トランスジェンダーの方への配慮を含め、支援の側が多様性や人権について普段から学び、非常時に当たり前に対応できる準備も必要である。

今後の活動

菫小避難所のみなさんへ

CAPPOこれからも!



①子どもの遊び場 おとなのしゃべり場
清音夢でらす 毎月第1土曜13:00~16:00
時間内出入り自由です。ぜひ、お顔を見せてくださいね。

②CAPPO集いの場（仮設開設後、OKが出た月から）
みその仮設住宅 集会所 毎月第3土曜
決まりしだい集会所等にて、お知らせしますね!

③ぞーる訪問看護ステーション(尾崎812-16)さんにて
毎週日曜8:00~12:00 支援物資配布の手伝いを時々。
生活の中で必要な物を!毎週違った物資を配布中。

菫小学校で出会えたこと、本当に感謝です。
お元気で、ぼちぼち進んでいきましょうね!
そして…また、お会いしましょう!

復興はまだ始まったばかりだ。退所された方が口にされたのは、未来への不安であり、被災を受け止めかねている落ち着かなさだった。「日常」に戻るにはまだまだ見通しが持てない状況は、みなし仮設でも、仮設住宅でも、自宅でも同じだ。「避難所にいれば、まだこうしてみんなと話せた…。ここを出てから、どうなるんだろう…」と語られた年配のご夫婦の不安そうな顔が忘れられない。少なくとも月1回はお会いし、現状を共有し、不安を語りながら、歩みを進めるためにも伴走を続けたい。

左記は、避難所退所を前に最終週に配布したチラシ。

- ①きよね夢でらすにて。月1回の子どものおとなの居場所の開設。みなし仮設等に入居で、地域を離れ、孤立しがちな方々への傾聴。必要に応じて専門職へ繋ぐ場としての役割を果たしていきたい。
- ②みその仮設住宅にて。月1回の菫地区で集える場の開設。菫小学校避難所から移られた方も居られ、自宅に戻られた方も集いやすい場所で、傾聴の場を継続して持つ。避難所閉所を前に、避難されている方から希望された活動を。
- ③尾崎地区にある支援の場の支援活動への協力。また、支援者の支援も視野に入れて、活動していきたい。